サクラマスは、北はカムチャッカ、サハリン、沿海州。南は本州の利根川、千代川（鳥取県）、山口県、洛東江（韓国）などの川で生まれる。一～二年の淡水生活の後に海に降り、一年間の海洋生活の後、再び生まれた川へ産卵のために戻ってくる。海へ降りたサクラマスの若魚は、沿岸域でイカナゴなどの小型魚類やオキアミ類などを餌として、七～九月に平均二七センチ、二五五グラムとなり、オホーツク海で夏を過ごす。

その回遊範囲は、左図に見るようにカムチャッカ半島、千島列島、日本列島の西側のオホーツク海と日本海に押し込められたように見える。というより、サクラマスの回遊範囲はそこから東にはあまり拡大しない。

本当にごく稀に、図の外の東の太平洋で、カラフトマスやシロザケを狙う流し刺網漁で二キロ・五〇センチ大のサクラマスが混獲されることもある。しかしそれは論文として報告されるほど珍しいことである。

長年にわたる標識放流調査などから、サクラマスの一年間の季節ごとの回遊経路は推定されている。ここでは産卵遡上前の春の想定図のみを示した。

冬に南下したものが北上する様子がうかがえるが、左図の北半分での調査が無いので、ロシア沿岸での接岸の様子がよく分からない。ここいらのことは132ページで述べるイタマス（板マス）の存在ともからみ、水産庁の研究者にとっては不可侵領域に入ってしまう。海域としても問題としても究明してはいけない、究明できない領域であるということだ。

「北太平洋のサケ・マスは国旗をつけている」と言われるように、公海を泳いでいるサケは生まれた川のある国の所有物であるという母川国主義にもとづき、他国の川に帰るサケを沖合で獲ることは憚られる。

いろいろ調べてゆけば、日本海の沖合で獲ったサクラマスはどこの川に産卵に戻るのかが、だいたいは分かる。それゆえ、漁師も研究者もその点は突っ込まず、見て見ぬふりをする時代があった。

図：サクラマスの海洋生活と母なる川